

A 企画（政治思想）

企画分科会：20世紀の国際情勢と近現代中国における政治思想の展開

座長・コメンテーター：砂山幸雄（愛知大学）

報告1：森川裕貫（京都大学）

「第一次世界大戦後の中国における国際協調論とその射程」

報告2：水羽信男（広島大学）

「中国リベラリズムの一潮流——「戦国策派」を素材として」

報告3：中村元哉（津田塾大学）

「冷戦下の中国、香港、台湾のリベラリズム——1960年代～1970年代を中心に」

清朝末期から中国がますますグローバル化を加速させたなかで、〇〇イズムと称される様々な主義が20世紀以降の近現代中国に乱立した。とりわけ、世界規模での戦争と対立が近現代中国の政治思想の動向をその都度揺り動かしてきた。第一次世界大戦、第二次世界大戦、そして米ソ冷戦がそうである。そろそろ、近現代中国研究者として一つの道筋を示し、「当代」中国研究のさらなる発展を後押しすべき時が来ているのではないか。

本セッションは、以上のような問題意識に立って、3つの報告をおこなう。

第1報告（森川）「第一次世界大戦後の中国における国際協調論とその射程」は、伝統と近代、リベラリズムとナショナリズム、資本主義と社会主義を争点としながら中国の指針を探っていた1920年代において、“国際主義”とでもいうべき思想潮流が台頭していた歴史的意義を再考する。この思想潮流は日中が対立する1930年代にも流れ続けていたが、問題は、そのような思想潮流が第二次世界大戦期にどのように発展または変容したのか、ということである。第2報告（水羽）「中国リベラリズムの一潮流——「戦国策派」を素材として」は、リベラリズム陣営 vs. ファシズム陣営という当時の国際情勢が戦時期の政治思想に新たな潮流を生み出したことを確認する。こうして中国は戦後を迎えるが、たちどころに米ソ冷戦という国際情勢が覆いかぶさり、1949年までの政治思想は中国、香港、台湾へと広がり、それぞれの地域が連携と対立を繰り返しながら、独自の展開をみせることになる。第3報告（中村）「冷戦下の中国、香港、台湾のリベラリズム——1960年代～1970年代を中心に」は、“国際主義”とも親和的なリベラリズムが第二次世界大戦終結後から1970年代にかけて、どのような展開をみせたのかを整理する。